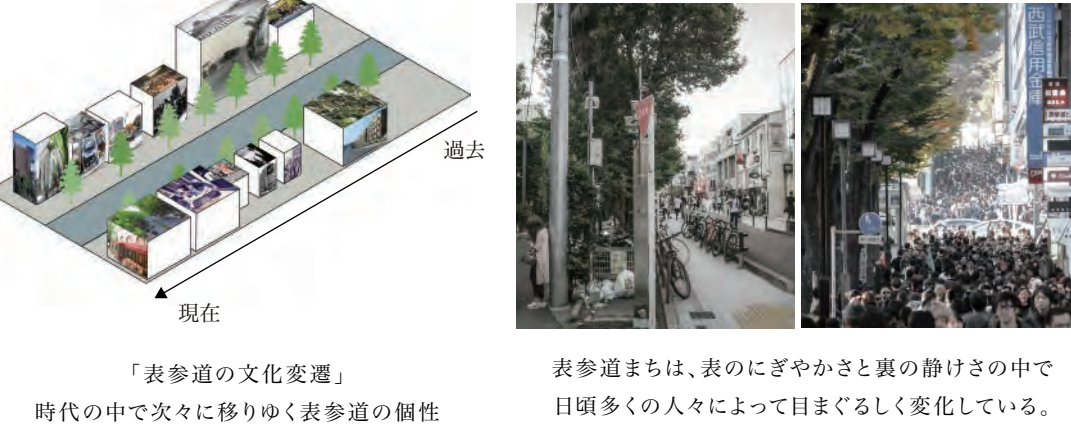


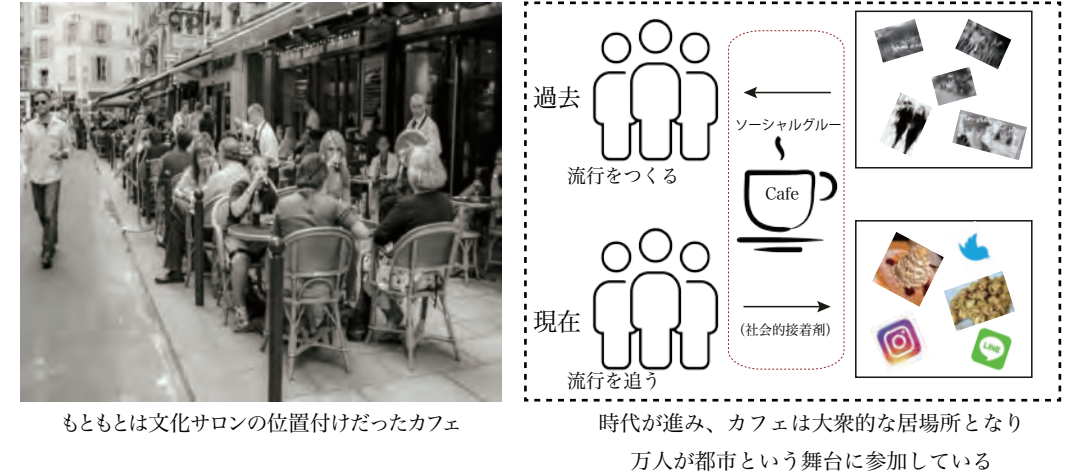
01/移りゆく街-表参道-

強い歴史的文脈の中にあり続け、時代の流行をリードしてきた表参道は人々の憧れの的になり、多種多様な人々を集め、時代と街をつくる人々により目まぐるしく街の様子を変化させて来た。



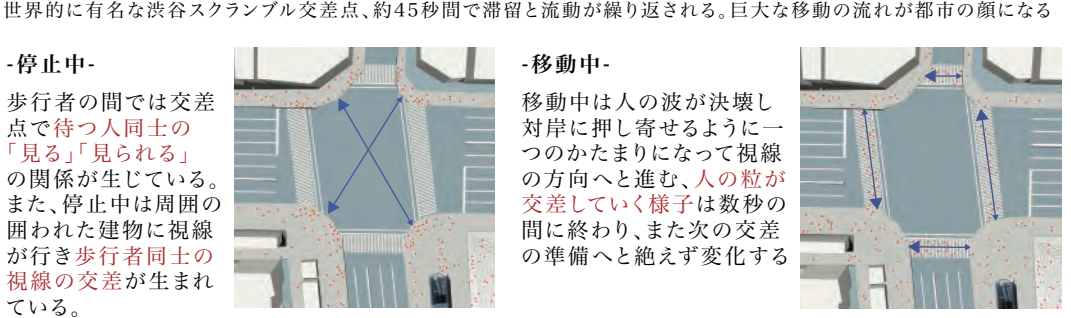
02/都市のベンチ「Cafe」

カフェは衆目の中で合法的に腰をおろすことができる都市のベンチである。表参道のケヤキ並木の下には表参道を横断するような都市のベンチが存在する事に着目した。私たちは都市の中で移り行く街を眺められるようなベンチのような建築を表参道の一部に提案する。カフェとしての建築は、変動を続ける表参道とまちを繋ぐソーシャルグルー（社会的接着材）としての意味を持つ。

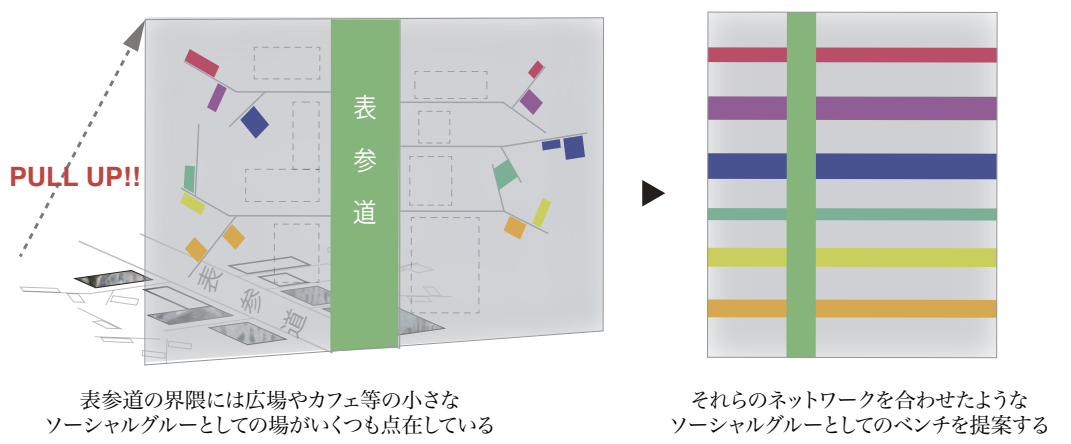


03/都市の顔「交差点」

都市移動の結節点。移り行く時代を象徴する広告や人々が集まる交差点は多くの都市の中でその都市の顔となる。この交差点のある一角に表参道を立ち上げたような都市のベンチとしてのカフェを配置する事で青山通りと表参道が交わるこの交差点を新たな表参道の顔へと変化する。

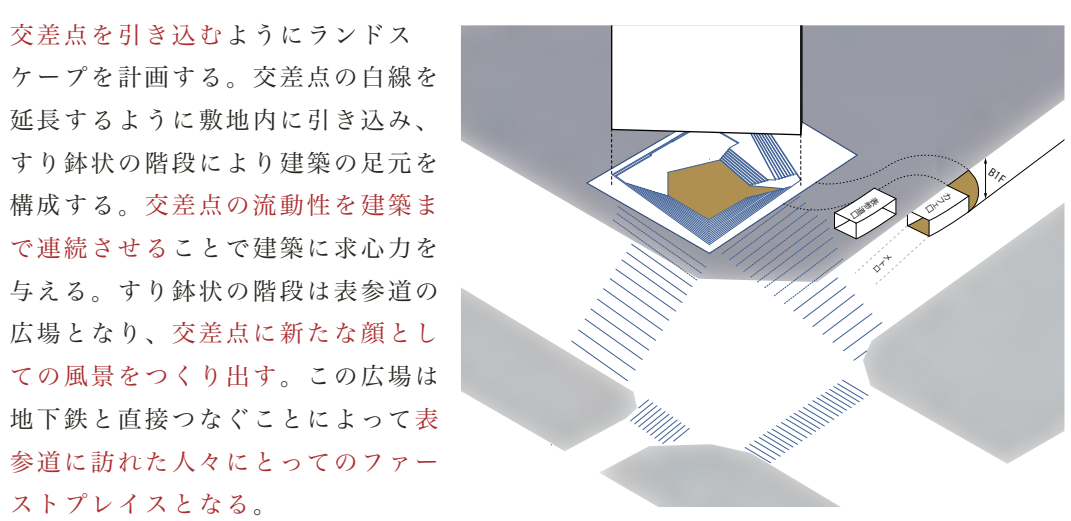


04/表参道を立ち上げた建築

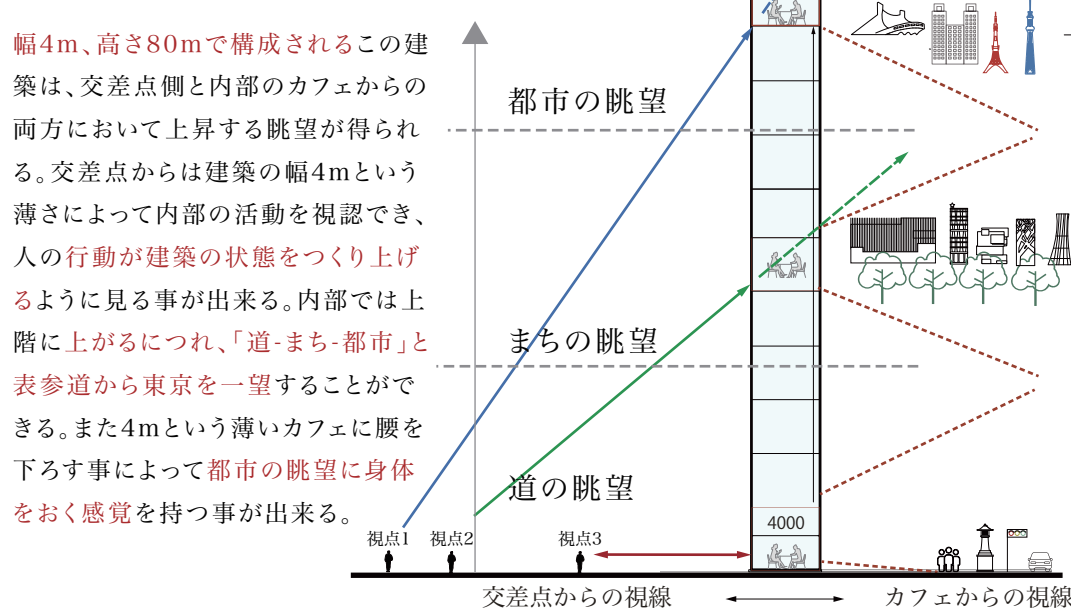


表参道を立ち上げたような建築を提案する。小さなソーシャルグルーは表参道の人や歴史を象徴している。これらを紡ぎ、移り行く状態を眺望する一つの大きな都市のベンチを立ち上げる。

05/交差点を引き込むランドスケープ



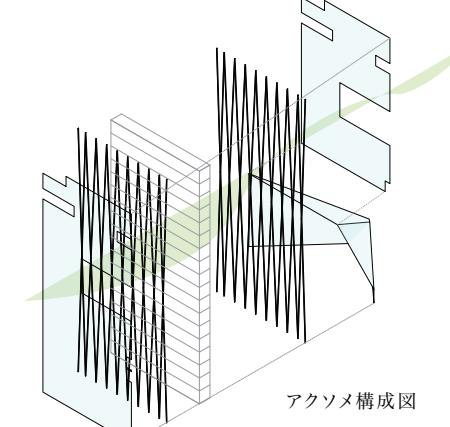
06/上昇する眺望



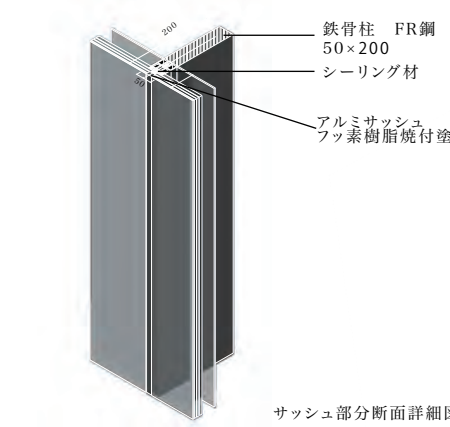
07/移り行く都市をながめるベンチ「表参道のカフェ」

■「薄さ」と「高さ」をつくる

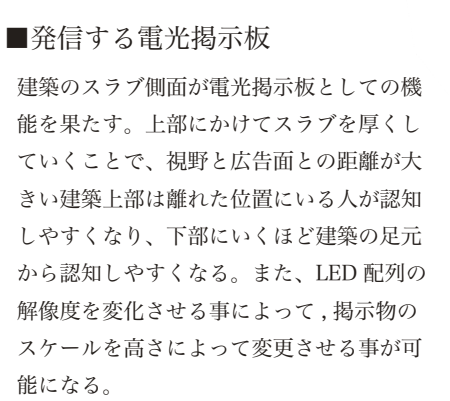
ファサード同士をパネルとして捉え、挟み込むことによるハニカム構造とする。しかしそれだけでは風力に対抗できないため風穴をあけ、風の通り道を作ることにより力を逃がす。



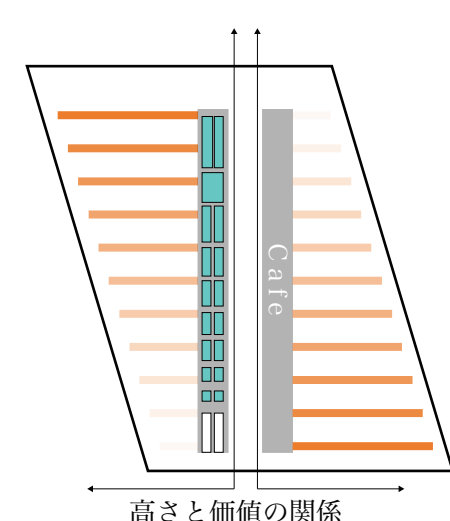
建築の透明化を図る。内外からの眺望を確保するために、耐火皮膜不要の鉄骨柱FR鋼を使用する。よってサッシュをシャープにすることが可能になる。



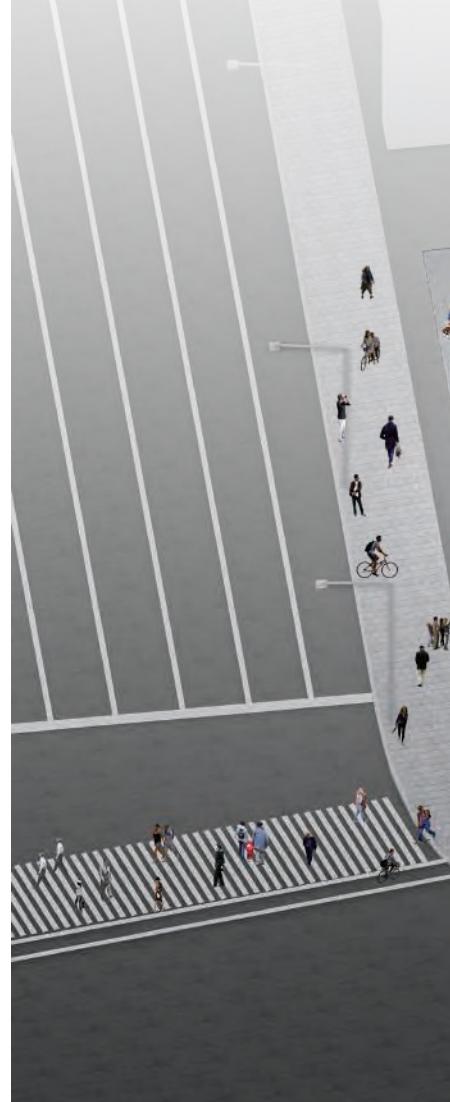
電光掲示板を明確に見せるためにフレームを見せなくする必要がある。そこで、SSG工法によるバックマロション方式を採用しサッシュが内部側に来ることによってファサードが強調される仕組みを作る。さらに、内側に入る柱がインテリアを支える構造や、間仕切り役目を果たす。



■新しいビルディングタイプとしてのカフェ

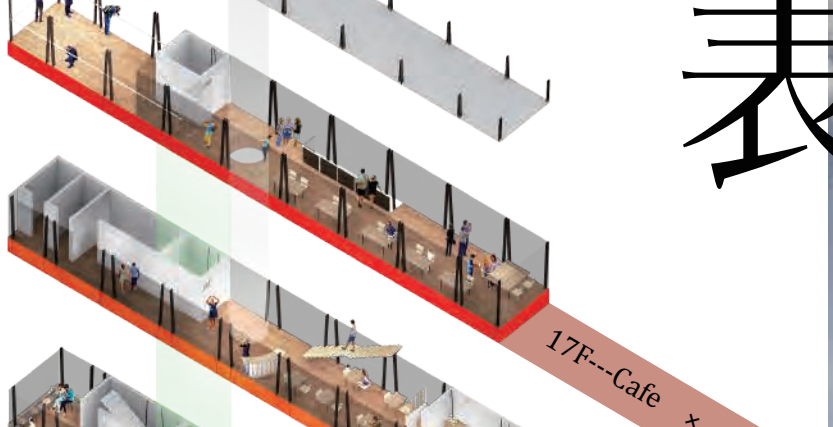


眺望の価値などで高層部にカフェが残ることはほとんどない。カフェは入りやすさや回転率などで階層が最適であると考えられている。この建築は、回転率と眺望の価値をビルとカフェだけで構成することでビルディングタイプとしての床価値をフラット化し、人々が陥入る新たなビルディングタイプを計画する。

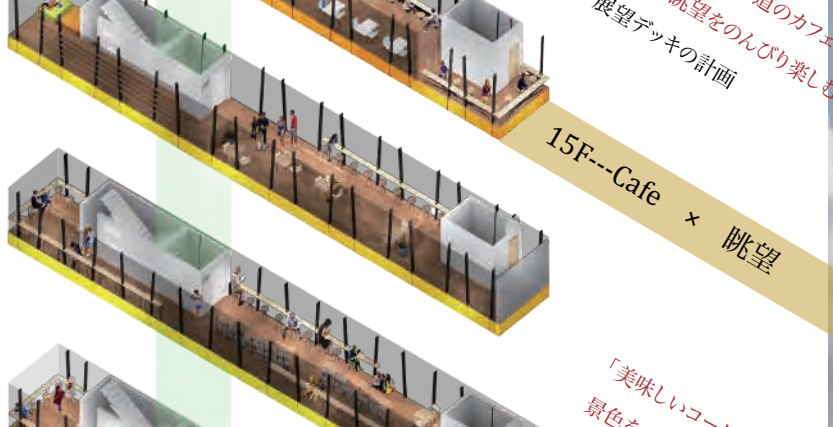


「薄さ」と「高さ」をつくる

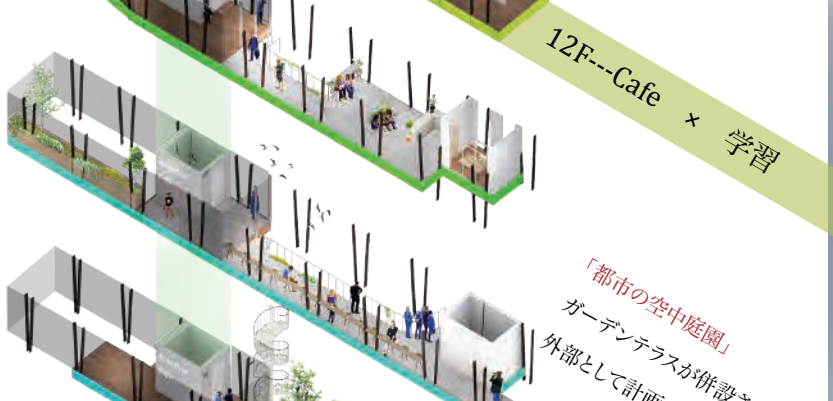
ファサード同士をパネルとして捉え、挟み込むことによるハニカム構造とする。しかしそれだけでは風力に対抗できないため風穴をあけ、風の通り道を作ることにより力を逃がす。



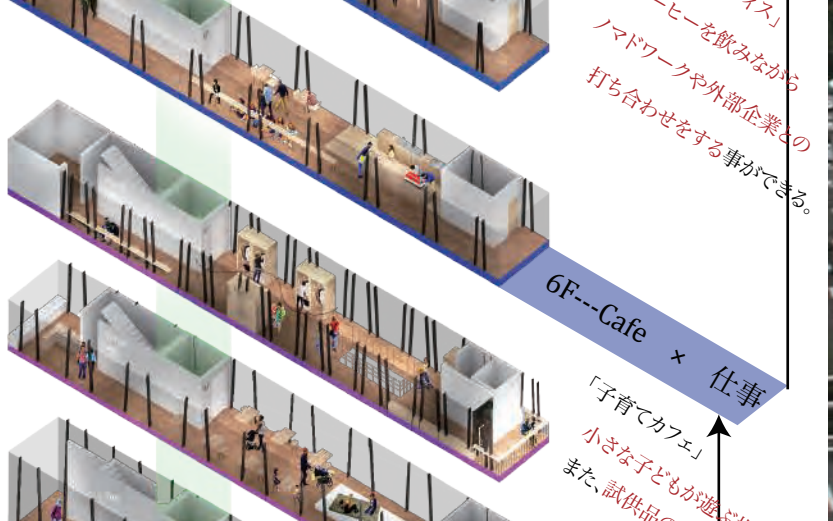
建築の透明化を図る。内外からの眺望を確保するために、耐火皮膜不要の鉄骨柱FR鋼を使用する。よってサッシュをシャープにすることが可能になる。



電光掲示板を明確に見せるためにフレームを見せなくする必要がある。そこで、SSG工法によるバックマロション方式を採用しサッシュが内部側に来ることによってファサードが強調される仕組みを作る。さらに、内側に入る柱がインテリアを支える構造や、間仕切り役目を果たす。



■新しいビルディングタイプとしてのカフェ



眺望の価値などで高層部にカフェが残ることはほとんどない。カフェは入りやすさや回転率などで階層が最適であると考えられている。この建築は、回転率と眺望の価値をビルとカフェだけで構成することでビルディングタイプとしての床価値をフラット化し、人々が陥入る新たなビルディングタイプを計画する。



表参道のCafe



眺望を貫通させる極薄のヴォリューム。高層階には大きなサインが流れ遠方の視線を引きつける。



立体的な動線が作り出す足下に広がるアトリウム空間は周辺の道と駅と連続し流れを上昇させる